



お二階へ
日常から少し浮遊した
もう一つの木のある場所

坪岡林業さん

吉野郡吉野町橋屋 1
0746 (52) 0118
<http://www.hijiriyama.com/>



製材職人さんのものづくり

吉野貯木の製材所で、エンドユーザーに向けた「ものづくり」にも取り組んでいるという例は少数派です。少数派なのですが、それぞれ違った味わいがある、興味深いのです。吉野貯木のまちで始まっている「ものづくり」をする製材所を訪ねます。



坪岡林業の坪岡常佳さんは相手の目をまっすぐに見る人です。まっすぐに見ながら、「わざわざ足を運んでくれた人が、その人らしい時間を持つのを楽しむ。そういう場所にしたい」と話します。

その場所は製材所の二階にあるのですが、初めて訪れたときは少しばかり驚くかも知れません。一階の作業場からラフな階段（吉野貯木にある工場の階段は急勾配で手すりなしの場合が多いです）をトントんと昇った先。

「時間を経たものが好き」という坪岡さんが始めた新しいブランド「ひじりやま 聖山」でのプロダクトと、年季の入った壁や窓のある空間が現われます。「気に入った椅子が好きに並べてレコードを聴いたり、ただただぼんやりしたり、思い思いに過ごしてもいいなあと」

ここでは、ものと空間から生まれる気配まるごとが作品です。坪岡さんのゆっくりとした話し方も、淹れてもらったお茶の香りも、窓の外の日差しも、全部が。

スギの木カヌーで
いつもと違う高さから
吉野の風景を眺めれば

イヌイ木工さん

吉野郡吉野町橋屋 42
0746 (32) 2505



吉野町木場内で異色の存在感を放つイヌイ木工さん。見るからに樹種も多く、サイズもいろいろな木が、工場にひしめいています。そんなイヌイ木工の乾紗太男さんが作ったものは、なんとカヌー。昨夏、二艘目が完成しました。「そこらへんにあった木で作った。木は安いもんですよ。防水剤が高いんや」と乾さん。（これは乾さんが吉野町木場での木の達人だからこそその台詞ですけれど）

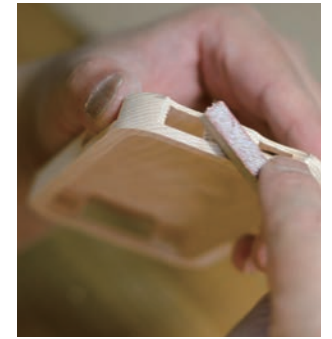
出来上がったカヌーは、木材を何層にも積み重ねた緻密な作り、そして大らかで美しいカーブを持っていきます。素朴なパドルも手作りです。このスギカヌーが、吉野町木場の眼前を流れる吉野川に似合わないわけがない！

実は、スギで船を作るというのは古代からの習わし。「スサノオが、スギで船、ヒノキで宮殿を作るよ命じた」という神話が残されています。古代と現代。同じように木を使っていることに、日本と木の関わりの深さを実感します。

手のひらに吉野材
端正なスマートフォンケース
いかがですか

丸商店さん

吉野郡吉野町丹治 69
0746 (32) 2301
<http://www.marushouten.co.jp/>



丸商店さんは、日本中から様々な（ときには突拍子もない）注文が寄せられる集成材の先駆者。ここにしかない機械と特別な技術を持っている製材所です。

一方で、ちょっと気の利いた生活雑貨をコツコツ作ったりもしています。例えば無垢材のスマートフォンケース。さらりとして温かみのある手ざわり、良い香り、美しい色と木目。吉野材の魅力をぎゅっと凝縮した、手のひらに収まるっておきです。担当者の中西さんは、「世界に一つのカバーです。一つずつ製造ナンバーをつけて作っています。木もそれぞれ個性が違って、お客様のお気に入りの一つを見つけてほしいという思い、木をもっと知ってほしいという思いからの発想です」と。

ラインナップは、スギ、ヒノキの定番品と、神代杉を使った限定品など。超高性能マシンでパーツを作り、組み立て、仕上げは一つずつ手でやすり掛け。小さくても手をかけた端正な木の小物です。

ぽろろんろん
吉野材を使って作る
わたしだけのウクレレ

杉本弦楽器製作所さん

<http://www.yasuinstrumentmfg.com/>



「柔らかい木と硬い木では音の反射の具合が違う。樹種の組み合わせを変えると音が全く変わる」「音を響きやすくするためには、表板ではなく裏板を削って微調整する」など、杉本弦楽器製作所の杉本康さんの話は大人の理科の授業みたいです。

そんな若きギター職人さんの夢は、「いつかギター製作教室を開く」こと。木がたくさんある吉野でできたら、すごく面白い！

手始めに杉本さん、「馴染みやすいと思うので」と、ウクレレを作る教室を計画。市販の制作キットにひと工夫して、一部吉野材を取り入れたものを準備しました。このキット、接着剤で各パーツを張り合わせて完成なんてことはなく、音を作るため木のいろんな所を削って聴いて削って聴いて作り込んでいく入魂必至の作。

ギターづくりの本場アメリカで学んだ杉本さんのノウハウを注ぎ込んだ楽器づくりの教室は、もうすぐはじまりますよー。

木の音、木の色、木の性格

吉野貯木から少しばかり離れたところへー。吉野材を生かしたステキなものを作る人、作られる場所を訪ねてきました。木を愛する人が作る、木のデザイン。それは必需品ではないけれど、それが身近にあることで、うんと豊かな時間を持てるものです。



ヒノキ色ふんわり
灯して消して
消して灯して

あかり工房 吉野さん

吉野郡大淀町北野 13-12
0746 (32) 5282
<http://www.akari-yoshino.com/>



あかり工房吉野の坂本尚世さんの作品を見てみると、本当にほっとした気持ちになります。ヒノキを薄くスライスしたものを貼り合わせたシェードを透かした光は、温かく柔らかなオレンジ色。だんだん心が鎮まってくるのです。

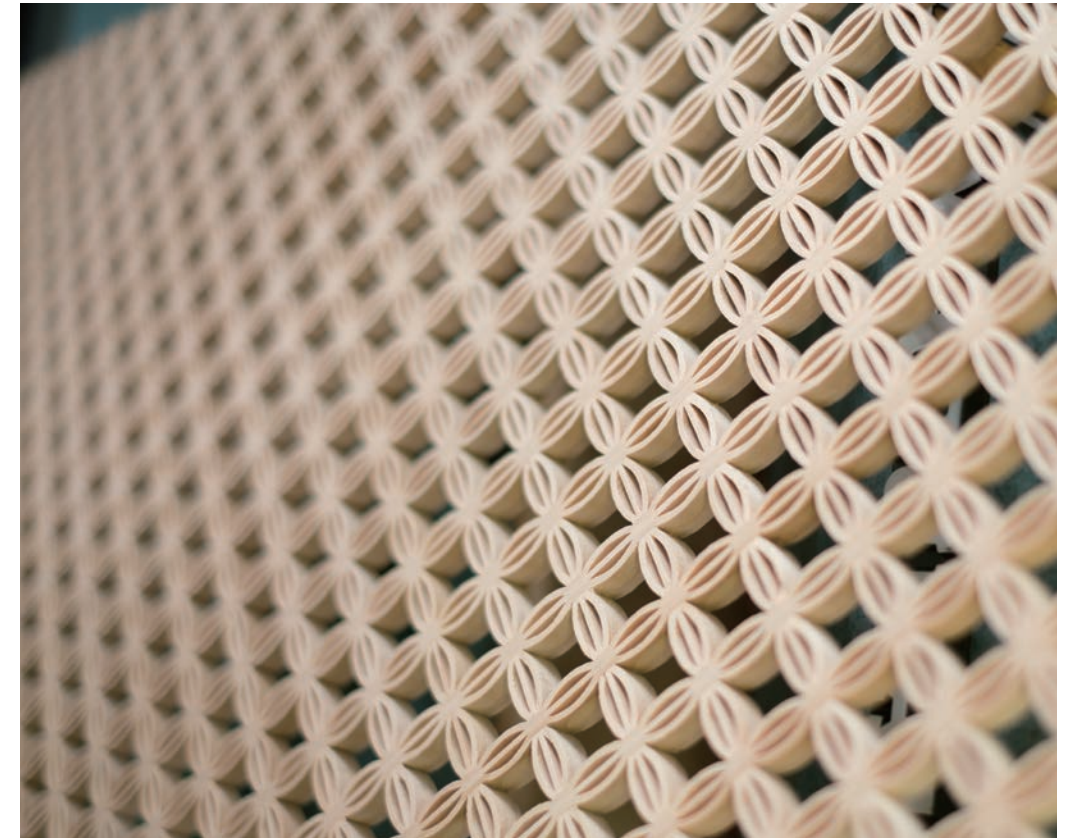
坂本さんは「ライトテラピー」という言葉に出会い、あかり作家への道を歩き始めました「その頃は私のようなやり方は誰もしてなくて、ひたすら試行錯誤でした。削り方、木のどの部位を使うか、厚み。最初の2年くらいは試してみても失敗して（笑）」

彼女は理想のあかりを作るためにヒノキを選んでいきます。と、同時に吉野町で製材業を営む家に生まれ育ったこともあり、「吉野の人や場所のステキさを知ってもらいたい」という気持ちも人一倍。とても楽しいと人気の高い坂本さんのあかりのワークショップでは、坂本さんの穏やかで優しい思いのこもった語りを通して、吉野の魅力に触れる人がたくさんいます。

ティッシュ1枚分
狂わない名人芸
欄間職人の技に見惚れます

和田工芸さん

吉野郡吉野町千股 345
0746 (32) 3846



和田奈良一さんの仕事場は、いつも整然としています。手入れの行き届いた道具たちは、壁や引き出しの定位置にきちんと収まり、年季の入った機械もぴかぴかです。

和田さんの作品にみられる「七宝」の意匠は、伝統的な欄間模様。輪が連続するこのデザインは、木を削り出したパーツ（そう、曲げ木ではないのです）が、ぴったり合うことで構成されています。1つのパーツの厚みは約1.8ミリ。「削るときにティッシュ1枚分狂ったら合わんようになるね」と普通の顔で言う和田さん。手仕事の、その圧倒的な精密さに呆然。

この驚くべき繊細な作業を、和田さん自作の道具が支えます。親指ほどの小さな小さな鉋に、刃の厚さ0.2ミリの鋸。この鋸は、和田さんが約1カ月かけて、この薄さまで砥石で砥ぎ上げます。

「注文されたらなんでも作るよ。難しいやつ考えてや」。笑って話す和田さんに、止まない向上心、職人としての凄みを見ました。